

## ロシア文化の性格

— 風土との聯關に於ける —

## 別 技 篤 彦

歴史的な性格を持たぬ風土的形象がないごとく、風土的性格を持たぬ歴史的な形成物もない。人間は歴史的なると同時に風土的な規定を受ける。その血脈と脳髓、精神と觀念、意欲と能力などの中に風土の消し難き痕跡を留め、それは一定地域内の歴史的な文化として特殊な性格を帯びつつ顯現する。今かゝる『風土的人間』の創造にかゝる文化類型の一つとしてロシアのそれをとつてこの立場から展望しよう。蓋し既にロシア歴史に對して、かのクルチェフスキーが土壤・植物帯の分布、河川系統の組合せ、及び歐露中央部に於ける自然的結合點の三條件の立場からその重要性を論じた如く、<sup>①</sup>一般ロシア文化の性格に於ても、他の如何なる國にも増してその『茫漠として涯しない曠野や、鬱蒼たる森林や、多く灰色に曇り勝ちな冬空や、狂暴な風雪や、凡てかういふ單調で變化に乏しい峻嚴な自然的條件』<sup>②</sup>の浸潤が明らかに感ぜられるからである。それは潤色の程度に於て或はその深刻な歴史的條件によるものよりも却つて強大

であるかも知れぬ。尤も文化現象全般に亘つての考察はなほ筆者のよく爲し得るところではない。こゝでは單なるロシア文化の愛好者の一人としてその民族性、文學及び音樂等を主たる對象として若干の覺え書的なものを作成したに止まることを斷つて置く次第である。

① W. Klutschewskij: *Geschichte Russlands*. Stuttgart. 1925 Bd. I. S. 53.

② 米川正夫、十九世紀ロシアのリアリズム文學、(八杉先生遺曆記念論文集)、昭和十四年、二頁。

## 二

本稿に採れるロシアとは地理的にはウラル山脈以西の歐露であり、歴史的にはソウェイト政權成立以前のものと限定したい。即ち歐露こそは本來ロシア的なるものの郷土であり、また現在のソウェイト治下にあつては強權の存在が本質的なるものを著しく歪曲せしめてゐるからである。蓋し強權は勿論全ロシア史を通じて常に存在したものであるが、現在のそれは程度と本質に於て過去のものと比すべくもない。また此の抑壓の下に於ても本來のロシア的なるものは徐々に擡頭しつゝある如くであるが、<sup>①</sup>なほ敘述の便宜上、以上の限定に従ひたいと思ふ。

われ／＼はまづロシア的風土の性格から検討しなければならぬ。嘗て皇帝アレクサンダー三世はロシアは世界の第七大陸であると誇稱したがそれは一面の眞理を含んでゐる。老大なこの國の風土は東亞にも亦西歐にも斷じて類型を見ぬ特殊な性格を備へてゐる。

ロシアの風土の支配的な条件の一つはその氣候である。地域が廣大なるに拘らず、地表面の同質的特性のために北より南へ、また西より東への氣候的變化は一應緩和せしめられ、全地域に互る同質的特性を與へられることとなる。

『地形の無限なる如く、氣候もそれ自身倦怠的な同質性をもつ。』<sup>②</sup>然らばその具體的特質は何であるか。『ロシア古代史の最も重要な舞臺である歐露の中部を標準にとれば、冬は厳しく永く、オレンブルグの冬季各月の氣溫すら、北極洋に臨むアルハンゲルスクよりも寒く、氷雪が地を覆ふ。』<sup>③</sup>雪こそはロシアの冬の象徴である。而して『雪は吾人の存在を規定するそれ自身の力の表現』<sup>④</sup>である。ロシアの雪は同時に激烈な雪嵐ユキカミを伴ひ巨大な單調性を以て人間を壓する。人はトルストイの『主人と下男』や、プーシュキンの『雪嵐』等に於てロシアの冬の如何に威壓的なるかを讀みとるであらう。ここでは人間は自己を徹し得ない。それは西歐に於けるとく、内からの緊張によつて克服し得る程度のもではない。冬へのあらゆる挑戦や抵抗は無意味である。ここに絶対に近き忍従が要求されるであらう。天候を支配する神ペルンは早く原始スラヴ人の間に於て畏敬された神である。<sup>⑤</sup>また古き傳説に現れた『不死のコシチユイ』を見よ。これは冬を象徴すると云はれる。<sup>⑥</sup>不死なるものは人間力を超越した巨大な力の所有者でなければならぬ。彼らがロシアの冬にこれを感じたのは決して偶然ではないであらう。

同時にこの冬は陰鬱である。バンゼは既にゲルマン的歐洲に於てはその絶えず雲霧に閉される陰鬱な空が、事物の輪廓を明瞭ならしめず、所謂“Raumtiefe”の状態を現出して人間の想像力を刺戟し、心に無限の深さの觀念を惹起せしめると論じてゐる。<sup>⑦</sup>西歐程溼潤な海洋的氣候の影響を受けぬロシアにあつてもこの事實はやはり妥當する。即ちこの

自然により、『こゝでは凡てのものが濛朧とし、輪廓が限定されず、全體が平穩ではあるが、明瞭ならざる印象を残す。』<sup>④</sup>和辻博士が示されたる如く、ゲルマン的歐洲に於てはカントの哲學、ゲーテの文學、ベートーヴェンの音樂等に現れた無限の深みがかゝる風土の性格と一致するが、ここロシアにあつてもわれ／＼はこの性格に對應するものとして一派の文化人達の陰鬱ではあるが驚ろくべく深遠な眞理探究の精神を指摘し得るであらう。

ロシアに於ても春、夏、秋の季節は存在する。然し春、秋は漸く數週間の短時日に過ぎぬ。曆の上では春は三月八日から三ヶ月間であるが、實際は『屢々寒波の逆襲』<sup>⑩</sup>があり、五月初旬に至つて氷が融け始める程度である。此の瞬時の春に續く夏はかなり急速に氣温が上昇する。それは地域によつては白夜の現象を伴つて人間の精神を攪亂するけれども、結局はプーシキンも云ふ如く『南の冬のカリカチュア』<sup>⑪</sup>であり、『ちらりとしたと思ふ間もなく通過する』性質のものである。即ちその夏は十分刺戟的でありつつも持続性に乏し。

- ① 上田進、ソヴェートの詩（八杉先生還暦記念論文集）一四八頁。
- ② E. Banse: *Landschaft und Seele*. München 1928. S. 113.
- ③ Klutschewskij: a. a. O. S. 40.
- ④ P. H. Schmidt: *Philosophische Erdkunde*. Stuttgart 1937 S. 31.
- ⑤ Klutschewskij: a. a. O. S. 113.
- ⑥ 八杉貞利、上代よりプーシキンの出現まで（ロシア文學史）、世界文藝大辭典、昭和十一年、第七卷 六二三頁。
- ⑦ Banse: a. a. O. S. 87.
- ⑧ Klutschewskij: a. a. O. S. 61.

⑨ 和辻哲郎、風土、昭和十年、一八五頁。

⑩ Khitschewskij: a. a. O. S. 40.

⑪ プーシユキン、オネーギン(米川正夫譯)、岩波文庫版、一二二頁。

次にはロシアの平原的地形の性格である。平原は殆んど全土に亙り、歐露の中心部に於ても高さ三百米のヴェルグイ丘陵を除けば百米以上の高距を示す土地は殆んどない。『何だか黒い蚤のやうなものが眞裸な一直線の地平に沿つて動いてゐる。それは百姓が休閒地を起してゐるのである』<sup>①</sup>といふツルゲーネフの言葉は聊かこの廣大性の一面を物語るであらう『水平線の彼方で彎曲してゐる海洋の如き平らかな廣漠たる野は北から南へ數百哩に亙つて延び處々の森や縁邊の黒い道でわづかにその單調性を破られてゐるに過ぎぬ。何らの變化も認め難く、色調は決定的である』<sup>②</sup>それは一面に於て自由、奔放な性格はもつであらう。『東歐の平原から始めて西歐に赴いた旅人は見慣れぬ景觀の多様性、線の鋭どさに一驚を喫するであらう。そこで、眼に見える凡ゆるものが制限され、封鎖され規定されたもののみである』<sup>③</sup>然しロシアにあつては平原は不變の單調性を持ち、従つて巨大な力を以て人間をその中に吸収してしまつてゐる風土なのである。

この平原は更に植物被覆の上から森林帯、黒土帯、ステップ帯の三つに分けても考へられよう。森林帯は北部に廣大な面積を占めて分布する。開拓の進まなかつた過去に於てはこの分布は更に南方へ延長してゐたものであらう。

『十七世紀になつてもなほスモレンスクからモスコゝに旅して來た西歐人の眼には全モスコゝ公國が一大森林として

映つたに違ひない。その森の中にわづかに大小の町や村の爲の空地が切り開かれてゐる状態であつた。『なほ一八八一年の政府の統計に於ても歐露の三九パーセントは森林である。』<sup>⑤</sup>

この森林帯が人間に對してもつ意義は亭々として聳える巨木にあるのでもなく、又底知れぬ静寂さにあるのでない。『恐らく渡り鳥でゞもなければ見透せぬその涯しなさ』<sup>⑥</sup>にあるのである。それは旅人に『この地上の怪物の胎内からはいつになつても脱け出せまい』<sup>⑦</sup>と感じさせる力を以て迫つてくる。且つ森林の中には敗殘の民族が潛み、野獸の襲撃があつた。『スラヴ人は森を愛してはゐなかつた。そこに起る急激な危険が彼らのフアンタジイを攪亂したからである。』<sup>⑧</sup>然し彼らは黙々として徐々に樹木を伐採し、地を開いて行つた。忍從的性格はこゝにも養はれたのであらう。

黒土帯は世界の穀倉である。然しそこには廣漠たる景觀の外に威壓的な自然として飛砂の現象があつた。『砂の雨は大地の形成自身にすら作用した巨大な自然力の一つである。』<sup>⑨</sup>それが一度び起ると廣い地域に互つて道路や堤防や湖を埋め、河川を濁らし收穫物に損害を與へ、『あらゆる財貨を沙漠に變ずる。』歐露でこれが被覆する平原は二百五十萬デシヤチンに見積られる。それは次第に黒土帯を埋め、『いつか南ロシアはトルキスタンの運命を辿るかも知れぬ』<sup>⑩</sup>ほどの力をもつてゐる。『政府は植樹その他の方法により飛砂の源であるステップ地方の砂を固定せんと試みたが五ヶ年もかゝつて僅に三萬デシヤチンを固定させ得たのみであつた。』<sup>⑪</sup>此の外ここには雪融けに伴ふ洪水の害がある。また北支の如く屢々蟲害がある。人はかゝる力に對しては等しく忍從する以外に道を知らぬ。而して短き夏を最大限に

利用して營々と農耕に従はねばならぬ。

更にステツプ帯に於ては雜草の海が限りなく廣がる。『如何なる程度にまで此の廣い自由なステツプが、實際境界なく見えるその無限性を以て古代ロシア人に廣さの感情と測り難き地平線の觀念とを育て上げたかを正確にいふ事は困難である。』それは計量することは困難であらう。たゞ計量を超越した單調性に於てそれが人間を威壓することだけは確かである。

かくの如くして、『ヘルデルリーンの本質が愛すべきシュワーベンの丘多き風景より來りし如く、ロシアの森やステツプは大ロシア人の文學の中に生きてゐる』ごとき状態を生むのである。<sup>(14)</sup>

① ツルゲーネフ、處女地(米川正夫譯)、新潮社版、三十三頁。

②③ Klitschewskij: a. a. O. S. 61.

④ Klitschewskij: a. a. O. S. 56.

⑤ Klitschewskij: a. a. O. S. 45.

⑥⑦⑧ チェホフ、シベリアの旅(神西清譯)、岩波文庫版、一一五頁。

⑧ Klitschewskij: a. a. O. S. 57.

⑨ P. H. Schmidt: a. a. O. S. 16.

⑩⑪⑫ Klitschewskij: a. a. O. S. 63 u. S. 58.

⑬ P. H. Schmidt: a. a. O. S. 73.

ロシアはまた世界最大の河川國である。幾多の世界的大河がこの平原を縦横に貫流する。これらの河流と民族の生

活の發展とが最も密接に結合してゐることは既にロシア史上に於ける常識的事項である。『意味深くもロシア人は母<sup>マチシユカ</sup>ヴォルガについて語る。』然しわれ／＼はその大いさについて考へねばならぬ。『一目見ただけではその雄大な廣い流れ(ドニエプル河を指す)は動いてゐるのか静止してゐるのか見分けがつかず、……無限の廣さと無限の長さにうね／＼と延び擴がつてゐる。』此の世にドニエプルを覆ひかくす事の出来るものはない。紺碧の色を湛え、洋々と氾濫して夜半も眞晝も變りなく流れてやまず、眼路の續く限り何處までも河である。それはわれ／＼の想像する河川の觀念を超越して屢々海を想はしめる。従つてかゝる大河が人間に與へる印象は直觀的には雄大であるが熟視すればそれはやはり巨大な單調性を以て迫つてくる。かくてロシアの河川もその平原の持つ如き風土的性格を帯び來る。

ロシアに於てはその風土はかく巨大であり、『密林帯では人間普通の尺度は役に立たぬ』と云つたチェホフの言葉は他のあらゆる自然にも妥當し、そこに独自の性格が作られる。この風土につゝまれたロシア人が如何に此らの性格をあのれに受容したか。『彼らの理解力、性格、活動力、思考力、感性から人間相互の關係の一部に至るまでこれとの聯關に立たぬものはなす。』われ／＼はロシアの風土に於て人間を見ると共に、ロシアの人間に於て風土を見るのである。

① P. H. Schmidt: a. a. O. S. 24.

②③ ユーゴリ、テイカーニカ近郷夜話(平井肇譯)、岩波文庫版、下巻、一六四頁。

④ Khutschewskij: a. a. O. S. 52.

### 三



ロシア民族性の特質については種々論ぜられてゐるが、風土との聯關に於て考へればその根本的性格の一つはまづ『驚嘆すべき忍従性』にあらう。

風土心理學的にみれば寒さは人間の精神を刺戟し、これを活動的ならしめる。『ドイツ人は空氣の冷たさを *Frische* とよび、その引き締る感じを喜んでゐる。』<sup>①</sup>然しロシアに於ては一般にさうではない。零下數十度に下るその極端な寒氣は寧ろこれを遲鈍、不活潑な方向へと導く。また風土の色彩についても、『白色は餘りに多量ならば心を強壓し、沈鬱ならしめる。』<sup>②</sup>この事は少くとも半年に亙る永き冬をもつ此の國に於ては眞理である。南歐の如く、風土が『從順で合理的な』<sup>③</sup>土地にあつては人は自然の中から法則を見出し、潑刺たる創造的能力を發展せしめ得るであらう。然しここにあつては人ははかく強壓せられたる心をもつて生活を許されるに過ぎぬ。

忍従の性格はおのれを取り圍む巨大な力の自覺によつて作られる。一見雄大に見える大河もロシア人の諦觀の形成にあづかつて力があつた。『人はヴォルガに對するとき、最初は奔放に振舞ふけれど遂には歌謡とよばれる呻吟に終る。明るい金色の希望はヴォルガにあつてはやがて一種の無力感に、所謂ロシアのベシミズムに變ずる。』<sup>④</sup>平原についても全く同じことが云へよう。それらの單調にして自由な自然はロシア人に空想性、奔放性を與へはする。彼らが理想主義的一面を有し、極端から極端に走る性格をもつ事もこれとの聯關に於て考へられよう。然し一度びおのれを省りみ、巨大な力の中にある粟粒の如き存在を見出したとき、そこに無抵抗を感じざるを得ぬであらう。この力は結局逃避し難き宿命である。哀愁はつねに彼らの心につきまといふ。『ニチエヴォ』の叫び、民族病たる『トスカ』の憂愁は

この宿命觀の表現でなくて何であらうか。

ロシア文學者にはかゝる『風土』を負ひ、その性格との一致に於て眺められる人々が少くない。従つてロシア文學に接した誰しもがまづ受ける印象は、『暗澹とした怪しい憂鬱』<sup>⑤</sup>である。彼らは現實には不満であるが、さりとして自らそれに抵抗する事も、亦それから逃避する事も出来ぬ。『だらりと手をぶら下げたまゝで』<sup>⑥</sup>歩いてゐる。この人々は諦めた平靜な態度で客觀的に生活現象や人間の心理を描寫するけれども、それはつねに一種の哀愁の中に溶けこんで『黄昏の世界』を作り出してゐる。われ／＼は例へばチェホフに於てかゝる『風土的人間』を見る。チェホフの如きは最もその眞實を把握し難い作家ではあるが、彼は他人の感激に値する如何なる現象にもおのれの血を湧かすことの出来なかつた人間であり、疲れ切つた智力と反應的な精神とが『櫻の園』、『谷間』等の作品に於けるごとく、その特色たるやるせなき哀愁に妥協して顯現してゐる。彼の背後にあつたものは獨りロシアインテリゲンチヤの絶望期といふ歴史的環境のみではない。

一方に於てはまた極端な壓世主義者が生れる。アンドレーフやソグロフはこれである。ソグロフの『光と影』の中に脈々と流れるペシミズムを見よ。『成熟——それは既に死への第一歩だ。』<sup>⑦</sup>陰鬱なる風土はつねに彼の上にあるごとくである。

① 和辻哲郎、前掲、一六七頁。

② ヘルバツハ、風土心理學(大日本文明協會譯)、大正四年、三四六頁。

③ 和辻哲郎、前掲、一二三頁。

④ チエホフ、シベリアの旅、前掲、一一四頁。

⑤ 米川正夫、ロシア文學、世界文藝大辭典、第六卷、六四二頁。

⑥ 昇曙夢、露西亞縱橫記、昭和九年、一六四頁。

⑦ ソログロフ、かくれんぼ・白い母、岩波文庫版、一一七頁。

その文學とともに世界の最高峯にあるロシア音樂にもかゝる性格は如實に認め得る。まづその豊富な民謡がある。

『民謡から吾人は、感情と母なる大地との關係の最も深き洞察を得る。』<sup>①</sup>古代スラヴ人の民謡にも彼らが自然に對してよせた感情が最もよく現れてゐるが、われ／＼は更にこれを音樂的に檢討するとき、次の如き諸點に氣づくであらう。まづその構成に於ける合唱的要素の優越これである。この事はギリシヤ正教の音樂が元來器樂を用ひなかつた事にもよるが、亦民族性が忍從的であり、自我や個性を主張し得ぬものであつたからではないか。例へばその古き『囚人の歌』に見ることく、その始めの一部を獨唱者が歌ひ、それに從つて他の全員が歌ふ唱法が如實に現れてゐる。<sup>②</sup>樂譜にあつて SOLO に續ぎつゝ TUTTI の記號があることは、この國の民謡の一大特色をなす。これは明らかにローマ時代の教會音樂の影響ではあるがそれが此の國に受容されたことは亦ロシアの性格との一致を物語る。忍從の性格は弱者のそれであり、被統率者のそれである。黙々としてより強き者へ從ふ心——ここにこの唱法を受容し得た大なる根據が潜むのではないか。

さらにそのメロディは全般に哀調をもつ。例へば一千年以上の昔から傳はるキエフ國王ウラジミルの饗宴の敘事詩

に附された曲を見よう。<sup>④</sup> 注意すべきはかゝる華麗な雰圍氣を讀へたものすら一種の哀調を帯びることである。なほこゝには同じメロディが幾度も繰り返されてゐる。その醸し出す單調感は殆どあらゆるロシア民謡に共通でありこゝにもわれ／＼はその風土の性格の現れをみる。

またロシア民謡の一特色はリズムの不整なことである。事實に、 $\frac{3}{4}$ 、 $\frac{4}{4}$ 、 $\frac{5}{4}$ 、 $\frac{6}{4}$ といふ如き異色ある拍子が多い。この事は南歐の民謡が主として $\frac{2}{4}$ 、 $\frac{3}{4}$ 等の拍子に統一されてゐるのに比し、著しい相違である。これは不安定を意味する。われ／＼はこゝでさきにロシアの夏が刺戟的でありつつも持続力に乏しいこと及びその平原的地形が奔放性をもつことを述べた點を想起せねばならぬ。

また彼らの民族樂器たるバラライカを見よ。これすらその風土にふさはしき音をもつ。それはイタリアの民族樂器たるマンドリンと同質の音でありながら、マンドリンのもつ南歐的明朗はここにはなく、重苦しき哀愁を響かすのである。或は十九世紀の初めミハイル・グリンカによつて輝かしき國民樂派が形成されて後もこの國に出た多くの樂人の作曲にこの性格をきき得よう。<sup>⑤</sup> ポロデインの交響樂詩『中央アジアの曠野にて』は廣漠たる沙漠を旅する隊商の群を描いてゐるが、彼の特色とする東洋的旋律を除いても、全體を一貫する寂しき、不活潑な美しさにロシアの風土性の一面を偲び得られよう。西歐派と目されるチャイコフスキーにあつても、ロシア的なる憂愁性は最もよく表現された。第六(悲愴)交響樂はその一つであり、また人は第五交響樂第四樂章の重苦しき、アンダンテ・カンタビレで知られる絃樂四重奏曲第一樂章の壓世的憂鬱性をきくがよい。

- ① P. H. Schmidt: a. a. O. S. 72.
- ② 八杉貞利、前掲書、六二四頁。
- ③ 世界民族音楽、(音楽講座第十九篇)、三十七頁
- ④ 同右、三十頁。
- ⑤ 中根 宏、ロシア國民樂派の源泉、(八杉先生還曆記念論文集)、三六三頁。

## 四

然しながらわれはロシア民族がかゝる憂愁に沈潜しつつも、社會的に壓制と革命の幾世紀を強く堪え來り、また堪えつつある事實を想起せねばならぬ。忍従は、かくて現實の苦難と血みどろに取り組んでつゞさにそれを熟視し得るもののみの性格でもある。ドストイェフスキー、レールモントフ、ゴーゴリ、ガルシン等はロシア文學者中ではかゝる類型に屬するいはゞ『強き人々』である。此等の人々の藝術には内面的不安や苦悶が主觀的に力強く深く表現される。主觀性の強調がベンゼの所謂“Raumtiefе”をもつ此の國の風土から出て來ることは既に述べた。殊にドストイェフスキーの作品の如きは寧息的な重苦しさを以て迫る點でいかにもロシア的である。またこれらにはヒステリイ患者・不具者・精神錯亂者などの異常な世界が假借なくリアリスティックに展開される。ロシアの巨大にして單調なる風土はある意味に於てリアリズムの世界である。ロマンチズムの世界は少くとも歐露の中心には存在してゐなかつたと云へよう。

さらにおのれ一人が弱く小さきにあらず、周囲の人々も皆同様なることを覺つたとき、他人に對する同情は湧然としてわき起るであらう。『惱める者、孤獨なるもの、弱きものに對しての同情はロシア人に接した誰もが感ずるところである。』<sup>①</sup>それはやがていと小さきおのれ自身に對する慰めに外ならぬ。人懐しさに結ばれた心情はまた必然的に友愛心、協同心に發展する。クリュチエフスキーは既にこの特質を別に風土の河川網の性格からも導いて論じた。<sup>②</sup>和辻氏の言葉を借りれば、この點に於てロシア人は少くとも『人間的であり、正直である。』<sup>③</sup>そしてこゝに同じく形に於ては老大であるが支那的風土の性格を受容する支那人とは異なる類型を見るのである。

① 昇曙夢、前掲、一五四頁。

② Klitschewskij: a. a. O. S. 59.

③ 和辻哲郎、前掲、二二〇頁。

同時に巨大な自然と社會的壓力との中におのれを見出して歎いた人々は、また絶對的なるものを求めて生の充實を計らずにはゐられない。それは苦しき戦ひである。かゝる人々のうち、あるものは内心この矛盾に堪え得ないで狂人となつたり、又あるものは道德や宗教に逃避せんとする。トルストイの消極的道德はその一例である。トルストイズムの眞髓は時代の塵に蔽はれたキリスト教の純な姿を啓示することにあつた。<sup>④</sup>いはば抵抗し難きロシア的壓力からの解脱がキリスト教の教義に求められたわけである。然し外に對して無抵抗でありつつも、反動として暫しは内に強く反撥せずにはゐられぬ。大作『アンナ・カレーニナ』は、『復讐はわれにあり、われこれを酬いむ』<sup>⑤</sup>との言葉の下に、お

のれの逃避した宗教の世界と相ひ容れぬ主人公の當然に負ふべき十字架を指示してゐる。この外ウズペンスキーなどもその生涯を修道院を尋ねて旅した巡禮であつた。われ／＼は今更の如くこの國に於けるギリシヤ正教の勢力を想ひみねばならぬ。』ロシアの町村に入つてまづ眼につく建物は教會であり、驛には必らず祭壇があり、家の各室には聖像がある。』<sup>③</sup>これもかゝる民族心理を知らずしては十分に理解されぬであらう。

然し高遠なる世界へ逃避し得ぬ多くの心は、さらに刹那的享樂の世界に向ふ。外に雪嵐が巨大なる力を以て狂ふとき、人は二重窓の内にペチカを圍み、團欒に時を過さねばならぬであらう。假面舞踏會・家庭劇・フオロヴオード・占ひ遊び等ロシア的なる享樂のいくつかはこゝに生れる。種々な季節に於て宗教と結合した多くの祭日もそれであつた。火酒<sup>ウイヅカ</sup>はこの憂鬱をやるものとして此の場合重大な役割を與へられた。

なほロシア文學の形式の上からは、會話が多量を占めることと長篇小説の多きことが特色となる。會話といつてもそれは多くの場合日常生活の些事に過ぎぬ。ドイツの冬がゲルマン民族の家庭性を作り上げたのにも似て、これも結局その永きにわたる屋内生活の所産に外ならぬ。こゝに議論好きな彼等の性格が発生する。人はロシア文藝作品の至る處にその例を見るであらう。ゴリーキーの『どん底』では社會の最下層の人々までが、とりとめなき單調な議論を楽しんでゐる。ロシア的性格を有する人々には會話の冗長性も不自然と感じられぬのであらう。然し外國人に讀まれる場合には相當厄介な要素である。またロシア文學は本質的に長篇小説の文學である。トルストイの『戦争と平和』、『アンナ・カレーニナ』、『ドストイェフスキーの』、『カラマゾフの兄弟』、『惡靈』等に示される如き超長篇小説の形

成——そのもつ單調性を寧ろ超越して悠々とテーマを進めてゆく粘液質的な作家の態度にも亦、この國の風土の性格と相通するものがある。

- ① トルストイ、光あるうちに光の中を歩め(米川正夫譯)、岩波文庫版。
- ② トルストイ、アンナ・カレーニナ(中村白葉譯)、岩波文庫版、第一頁。
- ③ 昇曙夢、前掲書、九五頁。
- ④ E. Pauses: a. a. O. S. 87.
- ⑤ 中村白葉、露西亞長篇小説の研究(八杉先生遺曆記念論文集)、七七頁。

## 五

人は南部のステツプ帯のみに於てはやゝ特殊な事情の下にある。ここでは遊牧の生活のみが許された。遊牧生活に於ては部族の協力が求められる。全體への服従は必然の結果である。而も同時にそれは移動的である。従つて一面に於ては人はロマンティックな色彩を帯ぶると共に、一面に於ては他部族との衝突からつねに戦闘的である。ここにこの両面をもつた特殊な性格が発生する。前衛的なコザックはそれに外ならぬ。これは北部、中部の風土のもつてはリアリズムの性格とは著しく異つたものである。われ／＼は『クラス・プーリバ』に於てこれを理解するであらう。また『デイカーニカ近郷夜話』に於て、『香はしきウクライナの空氣』を感得するであらう。北方のリアリズムに打ちひしがれたレールモンツフを魅惑し、彼を幸うじて救つたものは、またこの南方のロマンチズムに外ならなかつた。<sup>①</sup>



- ① ヴエ・プアノワ、十九世紀のロシア詩文學、(八杉先生還曆記念論文集)、六十一頁。

## 六

以上の外にもなほロシアには風土との聯關に於て考へ得べきいくつかの性格があらう。またこの小論は歴史的環境を考へぬ點で全く一面的なものに過ぎぬ。然しこの風土的半面なくしてはロシア文化の性格の完全な理解に到達することは遂に不可能である。既にシュミットが注意せる如く、あらゆる藝術的個人性(Personlichkeit)を全面的に風土のみより理解する危険<sup>①</sup>を知悉しつゝ敢て筆者がこれをものした理由はこゝに存する。

- ① P. H. Schmidt: a. a. O. S. 73.